

インド佛教への道しるべ (四)

—— 唯識佛教 ——

安井広濟

一

インドの大乗佛教は中觀と唯識であるといわれている。

これは教義を大別してのいい方であるが、それほどに、唯識佛教は中觀佛教とともに、インド大乗佛教において大きな比重を占めている。中觀佛教は一切の存在を因縁生とながめて「空」という。しかし、唯識佛教は一切の存在を自我の心のあらわれとながめて「唯識」という。

大乗佛教としては、空の思想に特色をもつのであるが、しかし、有をつくりだし流転をつづける自我の心の姿も反省すべきであって、この自我の心の反省の教学、これが唯識佛教である。インドでは、事実、中觀佛教から唯識佛教へと歴史的に展開し、後期になると、中觀瑜伽派というような学派もあらわれている。だから、中觀佛教と唯識佛教とは大乗佛教思想の、いわば、二本柱である

といつてよい。インド大乗佛教思想を学ぼうとするものは、中觀佛教とともに唯識佛教を学ぶことが、是非とも必要である。

中觀佛教は、佛教の教学すら否定して、空の眞実をただちに体験しようとする。しかし、これに反して、唯識佛教は、佛教の伝統的なアビダルマの心識にかんする学説や業習にかんする学説の大乗的な発展であり、その学説がアビダルマ的であり、説明的である。このために、唯識の学説は心理分析の学のように考えられやすい。中国の唯識学派である法相宗という名称は、この態度をあらわすように思われる。しかし、だからといって、唯識の学説は心象学説の如きものではない。インドにおける唯識学派の名称は、唯識論者 (Vijāna-matra-vadin) といわれることもあるが、正式には、瑜伽行派 (Yogācarin) といわれており、このばあい、Yogācarin とは、一切

の存在を唯識なりと観するヨーガの修行を行ずる者の意味である。つまり、唯識の学説は、人間の心理分析の学の如くであるが、あくまで、唯識の反省をうながす実践的な意味をもつことである。唯識の学説は、この意味において、また大乘佛教の空の思想の流れにある。このことは当然のことながら、唯識を学ぼうとするものが、つねに念頭において忘れてならない点であると思われる。

二

さて、インドの唯識佛教を学ぶには、どうしたらよいか。「道しるべ」は如何。これが、私に与えられている目下の課題である。しかし、これには、いろいろと方法もあることと思われるので、いまここで、とりあえず私は、先の本誌第七号に寄稿した「インド佛教への道しるべ」(中観佛教)にならない、まず、唯識佛教にかんする諸文献と、これらにたいする文献学的な諸研究とを紹介し、「道しるべ」の一端としたい。近代における唯識佛教の研究は、中観佛教と同じく、梵語やチベット語による文献学的な研究によって、半世紀ほどの間にめざましい進歩をとげているのであって、こういう文献学的な研

究の領域について知識をもつことが、学問をする者にとって、まず第一に必要なと思われるからである。

a

瑜伽行派の諸論書を見ると、多くの大乘經典が引用されている。これらの中、唯識思想の典拠となる文献として、特に注意すべきものは、次の三つの經典である。

(1) 「解深密經」(Saṃdhirimocana-sūtra)

この經典は、唯識思想の源流として最も重んぜられる根本經典で、アラーヤ識説、三性説、三無性説、止観行による唯識説、十波羅蜜、佛身などの重要教義を説いている。西暦紀元後二〇〇—三〇〇年ごろに成立した經典と推定される。梵語原典は発見されないが、チベット訳と漢訳とが存する。漢訳は、全訳として菩提流支訳と玄奘訳とがあり、部分訳として求那跋陀羅訳と真諦訳とがある。チベット訳は全訳で、ラモート教授によって出版され、また、フランス訳されている。このラモート教授の刊行本は、還元梵語を数多く註記するので、解説に便利である(Saṃdhirimocana-sūtra, L'explication des Mystères, Texte Tibetan Edité et Traduit par Etienne Lamotte, 1935)。なお、本書には「チベット訳に、(1)無着(Asaṅga)の註釈、(2)智蔵(Jñānagarbha)の〈慈氏章〉

のみの註釈、(3)寛通 (Bodhyiddhi) の註釈、との三種類の註釈書が伝えられており、このうち、(1)は西尾京雄教授によって邦訳され「佛地經論の研究」、破塵閣、昭和十五年、及び、大谷学報、第二十二巻、第一、三号)、(2)と(3)の「慈氏章」とは野沢静証博士によって邦訳されている「大乘佛教瑜伽行の研究」、法藏館)。また、長沢実導博士「解深密經分別瑜伽品の研究」(大正大学研究紀要、第四十三輯)がある。

(2) 「大乘阿毘達磨經」(Abhidharma-sūtra)

この經典は、現存しない經典であるが、アーラヤ識思想を語る注意すべき經典であって、「撰大乘論」などの唯識關係の論書にしばしば引用されている。宇井伯寿博士「撰大乘論研究」(二八頁以下)、同博士「大乘阿毘達磨經と撰大乘論」(宗教研究 新二〇巻、四)・「再び撰大乘論と大乘阿毘達磨經とについて」(駒沢佛教年報、五巻、一)など参照のこと。

(3) 「入楞伽經」(Laṅkāvatāra-sūtra)

この經典は、大乘佛教の多種の重要教義を書きとめた一大要集の如き經典であって、解深密經のようにもっぱら唯識思想を語る經典というわけではないが、八識、三性、熏習の教義が述べられており、アーラヤ識が如来藏

と結びつけられるなど、唯識思想研究に注意すべき問題を含んだ經典である。成立は、大乘佛教の多種の教義を含むところから、解深密經と同時代、あるいは、それよりすこしくだるのではないかと考えられる。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存する。漢訳には、求那跋陀羅訳(四巻)、菩提流支訳(十巻)、実叉難陀訳(七巻)の三種があり、梵語原典は南条文雄博士によって刊行されている(大谷大学発行、一九二三年)。本經にたいする研究のまとまった業績としては、鈴木大拙博士の英文の「翻訳」、「研究」、「索引」の三部の大作がある。(The Laṅkāvatāra Sūtra; Studies in the Laṅkāvatāra Sūtra; An Index to the Laṅkāvatāra Sūtra)。邦訳として、泉芳環教授の「邦訳梵文入楞伽經」があるが、かなり翻訳が杜撰である。筆者は最近、梵文和訳を試み、「無常品」より「食肉品」まで(p. 136-p. 259)を公表した(「大谷大学研究年報」第二十集。「大谷学報」第四十八巻、二。第四十三巻、二)。なお、本經には、チベット訳に智吉祥賢(Jñānasribhadra)の註釈書があり、山口益博士によってその内容が紹介されている(「智吉祥賢の入楞伽經註について」、日本佛教学会年報、八)。

インドの唯識佛教は「解深密經」などの經典を所依とし、無着 (Asaṅga 310-390)、世親 (Vasubandhu 320-400) の兄弟によって大成されたのであるが——世親の年代については論議があり、四〇〇——四八〇ともされる。校部建氏「フラウワルナーの世親年代論について」(印佛研一、一)、服部正明氏「ディグナーガ及びその周辺の年代」(塚本善隆博士頌壽記念論集)——瑜伽行派の伝説によると、兄の無着は兜率天の弥勒菩薩から教えを受けた、といわれている。以下に紹介する「大乘莊嚴經論」「中辺分別論」「法性分別論」「現觀莊嚴論」「究竟一乘宝性論」は、チベットの伝承によると、釈論が世親あるいは無着の作もあるが、本偈はすべて弥勒の作とされ、弥勒の五部の論といわれている。また、漢訳によると、最初にあげる「瑜伽師地論」は弥勒の作とされている。これは、神秘的な伝説であるが、無着以前にすでに歴史上の先輩となる論師が存在したことを示すのかも知れない。しかし、弥勒菩薩を無着の心中に映じた啓示的存在とも考えられるのであって、弥勒と無着との関係については、異論がある。いま、これらの論書と文献研究を紹介すると、次のようである。

(1) 「瑜伽師地論」(Yogācārabhūmi)

漢訳によると弥勒の作とされるが、チベット訳によると無着の作とされる。アーラヤ識説、三性三無性説、唯識説、アビダルマ学説、菩薩の教義など種々の問題を集成する龐大な論書であって、瑜伽行派の学説の発展の基礎になった最初の論書と見られる。漢訳には、玄奘訳一〇〇巻の完本の外に、部分訳として、菩薩地にあたる「菩薩地持經」(曇無讖訳)、「菩薩善戒經」(求那跋摩訳)決択分の初めにあたる「決定藏論」(真諦訳)がある。また、チベット訳も完本としてあるが、梵語原典の完本はない。現在、公刊の部分的梵本としては、荻原雲來博士によって校訂出版された菩薩地の梵本 (Bodhisattva-bhūmi, 2 vols. Tokyo 1930-1936) と、最近、バッターチャルヤ教授が、ラーフラ・サンクリティヤーヤナ氏がチベットで発見した梵文写本にもとづいて、第一分冊として校訂出版した本地分の五識身相応地から無尋無伺地まで(漢訳第一卷——第十卷)の梵本 (The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga, ed. by Vidhushekhara Bhattacharya, part 1, University of Calcutta, 1957) とがあるのみである。本書の研究としては、宇井伯寿博士に「瑜伽論研究」(岩波書店)、「梵漢対照・菩薩地索引」(西藏大藏經研究会)があり、また、同博士は、かつて「撰決択分」と

「決定藏論」との詳細な対照研究をした(印度哲学研究第六)。なお、本書の註釈として、漢訳に、最勝子(Jinaputra)の「瑜伽師地論釈」(第一巻のみ)があり、チベット訳に、徳光(Gunaprabha)の「菩薩地註」、同じく徳光の「菩薩戒品疏」、最勝子の「菩薩戒品広疏」、海雲(Sagaramegha)の「瑜伽行地中菩薩地解説」がある。

(2) 「大乘莊嚴經論」(Mahayana-sūtrāṅkara)

佛、菩薩の実践論を各種の方面よりアビダルマ的に説明し莊嚴した論著。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存在する。梵本に著者名を記さないが、チベット訳によると、本偈は弥勒、釈論は世親とされている。しかし、漢訳によると、本偈も釈論も無著の作とされており、著者について異論がある。梵本はシルヴァン・レヴィによってネパールより発見され一九〇七年に校訂出版され、(Asanga: Mahāyāna-Sūtrāṅkāra, paris 1907)一九一一年にフランス訳された。宇井伯寿博士の邦訳「大乘莊嚴經論の研究」(岩波書店)があり、また、長尾雅人博士は本書の「梵蔵索引」と「蔵梵索引」との二冊を出版した(Index to the Mahāyāna-Sūtrāṅkāra, part I, part II, 日本学術振興会)。これらは、本書の基礎的研究として見逃すことのできない労作である。なお、シルヴァン・レヴィ

イ本の欠文を補填する研究として、武内紹晃教授「大谷探検隊招来の〈大乘莊嚴經論〉について」(龍谷大学論集No. 352, pp. 72-87)がある。本書には、チベット訳に、安恵(Sthiramati)、無性(Asvabhava)、智吉祥(Jñānaśrī)の三種の註釈書が伝えられており、また、利他賢(Parahitabhadrā)の「莊嚴經論初二偈解説」がある。野沢静証博士「利他賢造〈莊嚴經論初二偈解説〉について」(宗教研究二、二)、「智吉祥造〈莊嚴經論総義〉について」(佛教研究二、二)など参照。

(3) 「中辺分別論」(Madhyāntavibhaga)

大乘佛教の根本思想である中道を弁別し明確にしようとするもので、三性説によって唯識説の立場や実践の中道たることが論じられている。梵語原典、チベット訳、漢訳(真諦訳、玄奘訳)、いずれも存在し、本偈は弥勒、釈論は世親の作とされている。安恵の註釈がついた梵本がシルヴァン・レヴィによって発見され、これを山口益博士が校訂出版し(Sthiramati: Madhyāntavibhagāṭikā, Nagoya 1934)、つづいて和訳し、さらに、本論の漢訳二本とチベット本との対照本を出版した。(鈴木学術財団より再刊)。なお、バッターチャルヤ教授とツウツチ教授によって出版された梵本もある。また、長尾雅人博士に

よって世親釈本論の梵本が校訂出版されている (Mādhyāntavibhāga-Bhāṣya, Tokyo 1964)。なおまた、本書には部分的翻訳として、スチエルバックの英訳 (Bibliotheca Buddhica No. 30 1938)、フリードマンの英訳 (Utrecht 1937)、オブライエンの英訳 (Monumenta Nipponica IX, 1953) がある。

(4) 「法法性分別論」 (Dharmadharmatvibhāga)

法 (雑染) より法性 (清浄) への転入の理論を究明し弁別する小論。本論は弥勒、釈論は世親の作である。梵文の断片とチベット訳とが存するが、漢訳は存しない。

梵文断片は河合英男氏によってシルヴァン・レヴィイ刊行の大乗莊嚴經論梵本の末尾に附されていることが発見せられ、山口益博士によって仔細に証定せられ学界に公表された (山口益「法法性分別論の梵文断片」大谷学報一七、四)。また、これにさきだち、チベット訳につたわる世親釈と本論とが山口博士によって邦訳されている (常盤博士還暦記念論叢「所収」)。なお、梵文断片は「山口博士還暦記念論叢」の中に野沢静証博士によってチベット訳とともに再録されている。研究としては、金倉円照博士「弥勒の法法性弁別論について」(叙説、第二輯 pp. 39-148) が注意される。

(5) 「現観莊嚴論」 (Abhisamayālaṅkāra)

弥勒の著作。二七二偈より成り、般若経の内容を、佛道修行の段階にもとづいて八章の組織で明らかにしたもので、般若経にたいする瑜伽行派的理解を示す論書である。インドでは、大智度論のような般若経註釈はまれであり、八千頌、二万五千頌などの般若経解釈に、すべて現観莊嚴論の方法が適用される。梵語原典とチベット訳は存するが、漢訳はない。オーベルミラーがスチエルバックと共に梵本を刊行し、また、ツッチ教授も梵文を刊行したが、荻原雲来博士が刊行したハリバドラ (Haribhadra) の「八千頌般若経にたいする註釈」 (Abhisamayālaṅkāra-loka prajñāpāramitāvyākhyā) の中に、全偈文が引用されている。オーベルミラーの研究 (Acta Orientalia 1932, pp. 1-133) があり、コンゼ博士の英訳 (Serie Oriental Roma VI, 1954) があり、また、荻原雲来文集に「現観莊嚴論玄談」、「現観莊嚴論和訳」がある。(この項、詳しくは山田龍城著「梵語佛典の諸文献」二二八頁、参照)。近時、ハリバドラの註釈にたいする研究がすすめられ、天野宏英氏「現観莊嚴論の著作目的について」(印佛研、一九、二)、同氏「ハリバドラの二諦説」(印佛研、一三、二)、真野龍海氏「ハリバドラ小註の研究」

(浄土宗教学院、佛教論叢、八号、九号。大正大学研究紀要、五二) などがある。

(6) 「究竟一乗宝性論」 (Ratnagotravibhāga-mahā-
yānottaratantraśāstra)

如来藏思想を集成し組織的に説いた代表的な論書。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存在する。梵語原典に作者を記さないが、漢訳では堅惠(saramati)の作とする。しかし、チベット訳では、本偈を弥勒、釈論を無着の作とする。本書の研究は、オーベルミラー教授がチベット訳の英訳を発表し(Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation, Acta Orientalia IX, 1931) ジェン・ストン教授が梵本を刊行(E. H. Johnston & T. Chowdhury: The Ratna-gotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra, Patna 1950) して以来、急速に進み、宇井伯寿博士は「宝性論研究」(梵文邦訳 岩波書店)を発表し、中村瑞隆博士はジョンストン刊行本を校訂しローマ字化し、これを漢訳と対照して発表した(山喜房)。また、最近、中村博士は「蔵和对訳・究竟一乗宝性論研究」(梵蔵漢対照の索引を含む、鈴木学術財団)を発表した。また、高崎直道氏は梵文の英訳を発表した(Serie Oriental Roma vol. 33, Roma 1966)。

c

右は、弥勒の作とされるもの、及び、弥勒の作で無着あるいは世親によって註釈されたものであるが、無着には、次のような独自の体系的な著作がある。

(7) 「撰大乘論」 (Mahāyānasamgraha)

大乘佛教思想を包摂する佛教概論ともいうべき論書。アラーヤ識、三性、唯識、菩薩、佛などの項目にわたり、瑜伽唯識思想が整然たる組織にまとめられている。梵語原典は発見されないが、チベット訳と漢訳とがあり、また、「世親釈論」と「無性釈論」とがいずれも、チベット訳と漢訳とに伝えられている。また、「秘義分別撰疏」という著者不明の註釈がチベット訳につたえられている。これは所知依分のみの註釈である。従来、日本における撰大乘論の研究は、漢訳の資料にもとづいておこなわれ、旧訳である真諦訳と新訳である玄奘訳との相異が強調せられ、新旧両訳の優劣に研究の重点をおいた感がある。宇井博士の大作である「撰大乘論研究」(昭和十年)では、旧訳が新訳より勝れた幾多の長所をもつことが示されている。しかし、チベット訳が準梵語原典であるところから、ラモート教授はチベット訳のフランス訳を多くの還元梵語を註記して発表した(La Somme du Grand Vehicule.

Tome 2, Louvain 1948-39)。また、佐々木月樵教授は昭和六年に山口益博士とともにチベット訳を附した漢訳四本対照の「撰大乘論」を刊行した。その後、本書の原典研究としては、長尾雅人博士「撰大乘論世親釈の漢藏本対照」(東方学報、京都第十三冊二分、昭和十八年)、武内紹晃教授「撰大乘論世親釈所知依分の組織と内容」(所知依分の邦訳、プリント本、1952)が注意される。また、論説として、高田仁覚教授「撰大乘論における阿頼耶識設定の密意」(密教文化、第二十一号)などがある。

(8) 「阿毘達磨集論」(Abhidharmasamuccaya)

種々の佛教の法相を分類し説明する阿毘達磨論書であるが、小乗の阿毘達磨の法相と異っており、瑜伽師地論に關係をもつもののようである。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存する。梵語原典はラーフラ・サンクリトヤーナ氏によってチベットで発見され、これをゴーカーレー教授が公表し(Fragment from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society, N. S. vol. 23, (1947) pp. 13-38) やらじ、ブランドン氏がゴーカーレー本の欠文の部分をチベット訳と漢訳とによって梵語に還元して補い刊行(Pralhad Pradhan: Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, Visva-Bharati

Studies 12, Santiniketan 1950) した。また、本書の註釈書(Bhāṣya)である大乘阿毘達磨雜集論(漢訳では安恵Shrinanati 糲とされるが、チベット訳では最勝子 Jinaputra の作とする)の梵語原典も発見されており、近々これがインドより出版されるとのことである。本書には、またチベット訳に、最勝子(Jinaputra)の解説書(Vyākhyā)も伝えられている。高崎正芳氏「阿毘達磨集論について」(大谷学報三六、二)、同氏「大乘阿毘達磨集論及び雜集論と三十頌安恵釈の関連について」(印佛研四一)など参照(書評 井ノ口泰淳氏〈阿毘達磨集論〉断片、佛教学研究 No. 6 服部正明氏〈Abhidharmasamuccaya〉、佛教文化研究 No. 2)

(9) 「顯揚聖教論」

漢訳(玄奘訳)のみ。本偈も釈論も無着の作とされる。しかし、本書の「成無性品」の別訳が真諦訳の「三無性論」にあたり、宇井博士は両者の詳細な対照研究をおこない、本頌を無着、釈論を世親の作とした(印度哲学研究第六)。また、結城令聞博士も、釈論を世親の作とする(「世親唯識の研究」五〇頁)。本書はあまり研究されないが、中観学派の清弁(Bhavaviveka)が瑜伽行派の三性説を論破するにさいし、本書の「成無性品」の第一偈、第二偈、第十偈などに見られる三性説をあげるところを

見ると、注目された論書のようなのである（安井広済著「中観思想の研究」二三〇、二五九、三〇六頁）。

(10) 「六門教授習定論」

漢訳（義浄訳）のみ。本偈は無着、釈論は世親の作。従来、あまり研究されなかったが、本書の国訳と詳細な註記とが宇井博士によって発表された（古代学二、二 pp. 117-137）。なお、安恵の「唯識三十頌釈論」の最後部に本書の第三偈が引用されるのが注意される。

(11) 「能断金剛般若波羅蜜多經論頌」（*Trisatikāyaṃ prajñāpāramitāyaḥ*）

ツウッチ教授によって梵語原典が英訳をつけて刊行（*Minor Buddhist Texts part 1, Roma 1956*）されている。本書にたいする「世親釈論」（義浄訳）があり、また、別本として、達磨笈多訳の「金剛般若論」（無著菩薩造）、菩提流支訳の「金剛般若波羅蜜經論」（天親菩薩造）がある。ツウッチ教授の発表が新しいが、本書については、宇井博士「金剛般若経及び論の翻訳並に註記」（『唯心の実践』所収）、同博士「名古屋大学文学部研究論集XII（哲学4）」を参照。

(12) 「順中論」

漢訳のみ。中論を部分的に引用解釈した小論である。

d

世親は始め小乗佛教に入り、アビダルマの学を研鑽し「俱舍論」をつくったが、兄無着の教誡によって大乘の唯識学へ転向したといわれている。千部の論主といわれ、著作がはなはだ多い。体系書があり、註釈書があり、論破の書があり、実に多方面にわたっている。しかし、ここでは、特に、唯識にかんするものを紹介する。

(1) 「大乘成業論」（*Karmasiddhi-prakaraṇa*）

部派佛教の各種の業論を批判して、佛教の業の教義を正しく弁証しようとするもので、俱舍論から大乘唯識説への世親の転入の段階を示す重要論書である。梵語原典は発見されないが、チベット訳と漢訳二本（玄奘訳、毘目智仙訳）とが存し、チベット訳に善恵戒（*Sumatīśīla*）の註釈書がつたえられている。本書にたいする研究としては、*Mélanges chinois et bouddhiques*, IV (1936) に掲載されたラモート教授の *Le traité de la Pratique de Vasubandhu, Karmasiddhi-prakaraṇa*（フランス訳と研究）があり、また、向田永静氏の論文「成業論の註釈的研究」（宗教研究第六年、第一輯）、結城令聞博士の研究「世親唯識の研究」所収、青山書院がある。また、山口博士は昭和二十六年にスマティシーラの註釈を邦訳し還

元梵語をつけて刊行した〔世親の成業論、法蔵館〕。(書評 安井広済〈大谷学報〉三二、二。pp. 85-89 勝呂信勝〈古代学〉二、二。pp. 185-188)

(2) 「唯識二十論」(Vimśatika Vijñaptimātratāsiddhi)

外教や小乗佛教の実在論的立場を論破して、唯識無境の立場を示す批判書であって、小論であるが、唯識の理論を理解する上に、すこぶる注意すべきものである。本書には、八識転変の相状は語られず、アーヤ識という言葉も見えず、詳細な心所の説明もないが、唯識という考え方の根本的な態度を学ばしめるものがある。本偈と釈論とより成るが、いずれも世親の作である。梵語原典はシルヴァン・レヴィによって安恵の「唯識三十頌釈論」とともにネパールにおいて発見され、校訂出版された(Vijñaptimātratāsiddhi, paris 1925)。チベット訳も漢訳も、いずれも存するが、漢訳には、瞿曇般若流支訳、真諦訳、玄奘訳の三訳があり、さらに、護法(Dharmapala)の註釈書である義浄訳の「成唯識宝生論」(漢訳のみ)がある。チベット訳には調伏天(Vinitadeva)の註釈がつたえられている。近代における本書の研究は、ド・ラ・ヴァレー・ブーサン、佐々木月樵、寺本婉雅、明石恵達の諸教授によっておこなわれたが、シルヴァン・レヴィ

の梵本の刊行以来、一九三二年にはシルヴァン・レヴィがこれをフランス訳し(Matériaux pour l'étude du système Vijñaptimātra, traduction de la Vinśatika et de la Triṃśikā, paris, 1932)、日本では、荻原雲来、稻津紀三、鈴木宗忠などの各教授の邦訳・研究が発表され、近くは、宇井伯寿「四訳対照唯識二十論研究」(岩波書店)、山口益「唯識二十論の原典解明」(『世親唯識の原典解明』所収)、安井広済「唯識二十論講義」(真宗大谷派安居、昭和二十九年)がある。これらの中、山口博士の原典解明は、本論とチベット訳につたわる調伏天(Vinitadeva)の註釈との邦訳である。護法の註釈書である「成唯識宝生論」にたいしては、宇井博士が詳細な研究をおこなった(名古屋大学文学部研究論集 VI, 1953)。なお、本書を研究するにさいし、富貴原章信博士「二十論の唯識義」(大谷大学研究年報 第七集)、結城令聞博士の「唯識二十論の研究」(『世親唯識の研究』所収、青山書院)は、原典的な研究ではないが、すぐれた研究であり、参考にすべきである。

(3) 「唯識三十頌」(Triṃśika-Vijñaptimātrakarikā)

解深密經に始まり弥勒・無着によって完成された唯識学説の大綱を三十の頌にまとめたものであるが、特に、識転変(Vijñānapariṇāma)の思想によって唯識の学説

を構成するところに特色をもった論書である。梵語原典、チベット訳、漢訳、いずれも存する。漢訳には、玄奘訳と真諦訳（転識論）との二訳がある。梵語原典は安恵の釈論（Bhāṣya）をつけて唯識二十論とともにシルヴァン・レヴィによって校訂刊行せられ、高楠・荻原両博士によってそれぞれ邦訳せられたが、これは従来、三十頌の唯一の釈論であった護法を正義とする漢訳「成唯識論」の講字に新たな批判を加えることになった。その後、本書にたいして、直接、間接、種々の研究が出た。海外では、シルヴァン・レヴィのフランス訳、ヤコービのドイツ訳（Stuttgart 1932）、フラウワルナーのドイツ訳（Berlin 1959）があり、日本では、稲津紀三教授「世親唯識の根本的研究」（大東出版社）、鈴木宗忠教授「世親における唯識哲学の展開」（佛教研究六、一）、寺本婉雅教授「梵藏漢和四訳対照・安恵造・唯識三十論疏」（大谷大学、昭和八年）、明石恵達教授「梵藏対校・安恵造・唯識三十頌釈（龍谷学報 323—328, 330, 333）が注意される。また、戦後では、宇井博士「安恵護法・唯識三十頌釈論」（岩波、昭和二十七年）が刊行され、つづいて、野沢静証博士「唯識三十論の原典解明」（『世親唯識の原典解明』所収）が刊行された。野沢博士の原典解明は、安

恵の註釈のみならず、チベット訳につたわる調伏天の復註をも邦訳したものである。また、長沢実導博士の「梵藏対照・唯識三十頌語彙」（大正大学紀要 四〇）も注意される。なお、結城令聞博士の「唯識三十頌の背景思想と造頌についての梗概」（『世親唯識の研究』所収）は、関係文献を数多くあげた考証研究であって、研究に裨益するところが多い。また、三十頌の研究にさいしては、古来の「成唯識論」の講字が注意されねばならないことは、いうまでもない。深浦正文博士「唯識学研究」（上下、永田文昌堂）、富貴原章信博士「護法宗唯識考」（法蔵館）などは、座右すべき書であらう。

(4) 「大乘五蘊論」(Pañcaskandha-prakarana)

色、受、想、行、識の五蘊の一々に簡潔な定義をほとんどこしたものの。小論であるが、唯識説における心所の説明を知る上に注意すべき論書である。梵語原典は発見されないが、チベット訳と漢訳とが存する。なお、本書にたいする註釈書として、安恵の「大乘広五蘊論」（漢訳とチベット訳とがある）があり、その他、さらに、チベット訳に、徳光（Gunaprabha）、月称（Candrakīrti）、地親（Bhūmibandhu）の註釈書が存する。本書にたいする研究としては、清井義雄氏「蔵文五蘊論和訳」（マニラ

三、大谷大学聖典語学会 昭和十年) V. V. Golhale <The Pañcaskandha by Vasubandhu and its commentary by Sthiramati, Bhandarkar Oriental Research Institute, vol. XVIII, part III, 1937>、山口益博士「月称造五蘊論における慧の心所の解釈」(金倉博士古稀記念印度学佛教学論集 pp. 293-321) が注意される。

(5) 「三性論偈」 (Trisvabhāva-nirdeśa)

遍計所執性、依他起性、円成実性の三性の学説を述べたもの。三十三偈の小論であるが、世親の三性説を知る上に注意すべき論書である。漢訳は存しない。しかし、シルヴァン・レヴィが一九二八年にネパールで梵本を発見し、山口博士がこれをチベット訳と対照し邦訳した。

(「世親造三性論偈の梵藏本及びその註釈的研究」宗教研究、新八、三)。しかし、チベット訳には、さらに龍樹に帰せられる別訳(北京影印 5248)があつて、これがむしろ梵本に近いので、ブーサン教授が二種類のチベット訳を対照した校訂梵文とフランス訳とを発表した (Mélanges chinois et bouddhiques, II, 1932-1933)。なお、本書には、ムケルジー教授の英訳・索引を附した出版がある (Visva-Bharati Series, No. 4, Calcutta 1939 詳しくは、山田龍城著「梵語文典諸文献」p. 136 参照)。また、本書には、寺本婉

雅教授のチベット訳よりの邦訳もある (「安惠造・唯識三論疏」所収)。

(6) 「中辺分別論」

(7) 「大乘莊嚴經論」

(8) 「法法性分別論」

(9) 「撰大乘論釈」

(10) 「六門教授習定論」

(11) 「金剛般若波羅蜜經論」

右の七つの論書については、先にふれたので、ここでは述べてない。

(12) 「釈軌論」 (Vyākhyāyukti)

經典を解釈する法軌を説いたもの。かなり大部の論書である。梵語原典、漢訳、いずれもつたわらず、チベット訳と、これにたいする德恵 (Gunamati) のチベット訳の註釈書「釈軌論註疏 Vyākhyāyukti-īka」がつたわるのである。従来、内容の明らかにされなかった論書であるが、山口博士によってその内容が紹介された (「世親の釈軌論について」日本佛教学会年報二五号。「大乘非佛説論に対する世親の論破——釈軌論第四章に対する「解題」東方学報、第二十五周年記念論文集、所収)。

(13) 「縁起經釈」 (Pratītyasamutpāda-vyākhyā)

「縁起経」(大正二二四)にたいする註釈。ツッチ

教授によって僅かの梵文断片が公表されている (IRAS. 1930 pp. 611-623)。漢訳は存しない。しかし、チベット訳があり、これにたいする詳細な徳恵の復釈「縁起初分分別広疏」がつたえられており、これが高田仁寛教授によって研究されている(「縁起の初分」〔Pratītyasamutpāda: 縁起初義〕に関する世親と徳恵との解釈「印度学佛教学七」)。また、フラウワルナー教授は本書をドイツ訳した (Aus Yasubandhu "Kommentar zum Sūtra vom abhängigen Entstehen", Die Philosophie des Buddhismus, Berlin 1956, pp. 43-49)。

その他、世親には、「大乘百法明門論」(漢)、「十地經論」(漢藏)、「無尽意所説広註」(藏)、「普賢行願註」(藏)、「無量寿経優波提舍」(漢)、「文殊師利菩薩問菩提経論」(漢藏)、「聖四法解説」(藏)、「勝思惟梵天所問経論」(漢)、「法華経論」(漢)、「佛性論」(漢)、「止観門論頌」(漢)、「如実論」(漢)、「戒譚」Śīlapāṭikā (藏)、「撰頌」Gāthasamgraha (藏)、「佛随念広註」(藏)などがあり、また、「阿毘達磨俱舍論」の如き名著がある。

e

唯識の学説は世親にいたって大成したが、世親以後は、多くの論師が輩出して、無着・世親の論書に註釈を加え、あるいは、学説を組織し、瑜伽行派として発展した。これらの中、その名が知られ、かつ著作が現存して重要と見られる論師は、陳那 (Dinnāga)、徳恵 (Gunaṃati)、無性 (Asvabhava)、安恵 (Sthiramati)、徳光 (Gunaprabha)、護法 (Dharmapāla)、戒賢 (Śīlabhadra)、最勝子 (Jinaputra)、調伏天 (Vinitadeva) などである。

しかし、瑜伽行派には、有相唯識派 (Sakrayādin) と無相唯識派 (Nirakrayādin) との二流派があって、陳那、無性、護法、戒賢、最勝子は前者にぞくし、徳恵、安恵、徳光(?)、調伏天は後者にぞくする。この二流派については、山口益博士「中観派における中観説の綱要書」(大谷大学研究年報、第二輯)、菅沼晃氏「寂護の識論」(東洋大学紀要、文学部篇、第十八集)を参考するとよい。

有相唯識派の始めをなす陳那 (Dinnāga 400-480 服部正明氏は 405-530 とする) は、インド論理学史上に新因明説を大成した学匠であって、「集量論」(Pramāṇasamuccaya-vṛtti) などの論理学の著作があり、また、八

千頌般若の要義をまとめた「円集要義論」(Prajāparā-mita-piṇḍartha)の如き著作もあり、唯識説にかんしては「観所縁縁論」(Ālambanaparīkṣā)の如き注目すべき著作がある。なお、掌中論(Hastavālaprakaraṇavī-tti解捲論)は、漢訳では陳那の著作とされるが、チベット訳では聖提婆(Ārya-Deva)の著作とされている。

本書については、トーマス教授と宇井博士の研究(JRAS, 1918)があり、長沢実導博士の「漢訳二本対照チベット訳手量論註和訳」(智山学報第四輯)がある。陳那の著作については、宇井博士「陳那著作の研究」(岩波書店)に詳しい。なお、「集量論」を始めとする佛教論理学については、現在、武邑尚邦、北川秀則、梶山雄一、服部正明、戸崎宏正などの各氏によって研究されている。「観所縁縁論」は、極微によってつくられた認識の対象(所縁)を論破して、所縁が唯識であることを論ずるもので、唯識説の構造をうかがわしめる重要な論書である。梵語原典は発見されないが、チベット訳と漢訳二本(真諦訳と玄奘訳)とが存し、また、チベット訳に調伏天の註釈書、漢訳に護法の註釈書である「観所縁縁論積」が存する。本書にたいする研究としては、本論を調伏天の註釈とともに邦訳し還元梵文をつけた山口益博士の「観所縁

論の原典解明」(「世親唯識の原典解明」所収)が、新しい研究のビブリオグラフィも同書に詳しい。

陳那の系統にぞくする無性(Asvabhava)に「大乘莊嚴經論」の註釈と「摂大乘論」の註釈があることは、さきに指摘した。また、この系統の護法(Dharmapala 530-561)に「成唯識宝生論」、「成唯識論」、「観所縁縁論積」の三書があることも指摘した。護法には、この他、聖提婆の「四百論」に註釈した「広百論積論」の如き著作もある。しかし、これらの護法の著作がいずれも漢訳のみにつたわり、梵語原典、チベット訳を欠くのは、どのような事情のためかわからないが、まことに残念である。しかし、護法の教学は玄奘によって中国につたわり法相宗として発展した。戒賢(Śīlabhadra 520-645)は護法の弟子で「佛地經論」(Buddhabhūmivyākhyāna)を作った。本書には、チベット訳と漢訳とが存し、西尾京雄教授の邦訳・研究がある(「佛地經論の研究」破塵閣、昭和十五年)。また、「瑜伽師地論」「阿毘達磨集論」に註釈を作った最勝子(Jinaputra)も護法の弟子とつたえられる。

無相唯識派の始めをなす德恵(Guṇamati)に「釈軌論註疏」「縁起初分分別広疏」がチベット訳につたわる

ことは、さきに指摘した。かれはまた、俱舍論に註し

「随相論」(漢)を作った。安恵 (Sthiramati 470-550,

510-570 という説もある) は徳恵の弟子で、「大乘莊

嚴經論」「中辺分別論」「阿毘達磨集論」「唯識三十頌」

「五蘊論」に註釈を作ったことは、さきに指摘した。ま

た、かれは、「大宝積經論」(漢、藏)「俱舍論実義疏」

(藏)を作った。かれは多くの註釈書を作った重要な無

相唯識派の論師である。徳光 (Gunaprabha) に「五蘊

論釈」「菩薩地註」「菩薩戒品疏」の著作があること

は、さきに指摘した。かれについては、豊原大成氏「徳

光論師の教学に就て」(印佛研一〇、二)を参照。調伏天

(Vinitadeva 630-700) は安恵の系統を引き、かれが世

親の「唯識二十論」、安恵の「唯識三十頌經論」にそれ

ぞれ註釈したこと、さきに指摘したとおりである。また、

かれには因明にかんする釈論もある。

この他、「大乘莊嚴經論」に註釈を作った智吉祥

(Jñāśrī)、利他賢 (Parahitabhaddra)、「五蘊論」に

註釈を作った地親 (Bhūmibandhu)、「成業論」に註釈

を作った善恵戒 (Sumatīśīla) など、いづれもこれらは

瑜伽行派の後期の学匠であったと見られる。

三

インドの唯識佛教にかんする文献乃至文献研究の注意すべきものは、およそ以上の如きものかと思われる。しかし、唯識佛教の教義の内容をどのように理解し勉強していけばよいか。唯識にかんする何か便利な参考書はないか。こういう声がしばしば聞かれる。しかし、現在、正直に言って、インドの唯識佛教は文献学的にも思想的にも充分に解明されているわけではない。だから、完全なものを求めることは出来ないが、たとえば、最近では、講座佛教Ⅲ「インドの佛教」(大蔵出版)、講座東洋思想5「佛教思想Ⅰ」(東京大学出版会)におさめられる勝呂信静氏の論文、あるいは、上田義文博士の「唯識思想入門」(永田文昌堂)などは手引きとなろう。戦前のものでは、福井威磨著「世親唯識の根本義」(東京、昭和十年)は良書である。また、結城令聞博士「唯識の思想と歴史」(大法輪閣)は、分りやすい。

専門書としては、まず、結城令聞博士「心意識論より見たる唯識思想史」(東方文化学院、昭和十年)、水野弘元博士「心識論と唯識説の発達」(「佛教の根本真理」宮本正尊編、所収)をあげねばならぬと思う。はじめに一言し

たように、唯識佛教はアビダルマ佛教の心識説や業説の発展であるからである。研究にころざすものは、これらの書によって、まず、唯識思想の源流をさぐるべきであろう。この方面では、勝又俊教博士「佛教における心識説の研究」(山喜房)が、よくまとめられた好著である。また、赤沼智善教授「佛教に於ける物と心」(「佛教教理之研究」所収)は、是非一読をすすめたい良書である。次に、無着・世親によって大成された唯識説については、すでに先にも指示したように、宇井博士の「撰大乘論研究」「印度哲学研究第六」があり、結城博士の「世親唯識の研究」がある。結城博士の研究は、かなり漢訳にかたよった研究であるが、客観的な方法の研究として注意される。また、稲津紀三教授「世親唯識の根本的研究」(大東出版社)、田中順照博士「空観と唯識観」(永田文昌堂)は、思索のあとの示されたすぐれた著作である。また、さきにも指示したが、宇井博士の「安恵護法唯識三十頌釈論」、山口野沢両博士による「世親唯識の原典解明」(書評 安井広済「古代学」5、2)は、原典の翻訳・研究として見逃せない貴重な参考書である。

唯識思想の研究としては、アーラヤ識を中心とする心識説や業説の研究よりも、むしろ初学者は、唯識無境を

語る「唯識二十論」や、三性説を中心とする「中辺分別論」の如き論書の研究を、さきにおこなうのがよいかも知れない。アーラヤ識の研究は、唯識思想の最も重要なテーマであるが、とかく微にいり細をうがった八識転変の心理分析の学におちいりやすい。初学者は、唯識二十論や中辺分別論によって、まず、唯識思想の哲学的立場や思想的立場をうかがうのがよいように思われる。また、「究竟一乘宝性論」に見られる如来藏思想も、唯識思想の展開として注意すべきである。

唯識佛教の研究は、中観佛教にくらべて、研究が多方面にわたるので、研究論文も多い。研究にころざすものが、各種の研究雑誌に目をくばらねばならないことは、いうまでもない。また、インドの唯識佛教を研究しようとするかぎり、梵語やチベット語の学習が必修であることも、いうまでもない。研究者は、梵語やチベット語の原典を自ら読む覚悟をもたねばならない。インドの唯識佛教の研究は、今後さらに、文献研究と思想研究とがあいまって、すすめられていくであろう。